まいごのまいごのふくろうさん。

かりん2022

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

記憶喪失となった。

呪術の世界で魔法の生徒だった。

夏油を救う縛りをしてた。

術式はない。

詰んでますが何か？（逆ギレ）

匿名感想はこちら

ｈｔｔｐｓ：／／ｍａｒｓｈｍａｌｌｏｗ－ｑａ．ｃｏｍ／ｌｕｃａｌｕｃａ

目次

おぶびりえいと ―― 1
とらんく ―― 6
アズカバーン！ ―― 12
俺に触れると火傷するぜ ―― 18
巣立ち ―― 25
過去 ―― 30
そうだ、高専に行こう　前編 ―― 35
そうだ、高専に行こう　後編 ―― 43
魔法界 ―― 50
クラウン ―― 55
小鳥 ―― 59
お祭り ―― 65

おぶびりえいと

知らない天井だ。

っていうか、覗き込んでくる顔も、自分の名前も、何も知らない。

「誰？　っていうか俺が誰？」

「記憶喪失かよ、雑魚な上に面倒くせぇな」

「悟。そういう事は思っていても言うものではないよ」

「君の名前は小鳥　梟。ここ、東京都立呪術高等専門学校の生徒だよ」

「……!?」

「なんだよ？」

「いや、呪術って物騒だなって思って」

「お前も呪術師だから。雑魚だけど」

「俺って何か出来るん？」

「術式はねーよ。雑魚オブ雑魚」

「そう」

とりあえず、部屋に連れて行かれる。

全く覚えがない。
これはもしや、転生という奴か。記憶喪失で押し通すしかない。本当に記憶喪失だけど。漫画の知識だけあるってさあ……。
色々見ていると、押し入れにトランクが見つかった。
トランクを開けると、中に階段があった。
質量保存の法則とは一体。
えっ　これって見つけちゃだめなやつじゃない？
更に色々漁る。
魔法処の飛び級卒業証書が見つかった。
魔法処あるのね……。ハリポタの知識もあったわ。
こういう時、お話とかでは日記があるけど、俺の場合はなかった。
どーしようこれ……どういう状況？　とりま、バレたらアカンよね？
　あ、カエルチョコ見っけ。
そうだ。呪術師やめよう。
俺は口の中でモゴモゴ動くカエルチョコを噛み砕きながら、決意した。

「ということで、呪術師やめます」
「縛りを結んでいるというのは良いのか」
「へ？」
「命を賭けてある人を助けるという縛りを結んでいるから入学したと聞いたが」
「誰？」
「教えてもらえなかった」
「は？　どういうことなの」
「ウケるｗｗｗ」
「こら、悟。笑っては駄目だよ。軽率に縛りを結ぶのは愚かな行為だと思うけどねｗｗ」
二分の一の確率でテメーのためですがなにか？
えー！
灰原と夏油を助けないといけないってこと!?　魔法がばれない縛りで!??
あ、黒井さんや、理子ちゃんの可能性も微粒子レベルで存在したりする!??
以前の俺は記憶持ちだな、間違いない。
じゃあ日記やＴＯＤＯリストぐらい作っておけよばかぁ!!
いや、流石にＴＯＤＯくらいは作ってるかも？

「もっかい家探しします……」
「そうしておけ」
はあ。困ったなぁ。

とりあえず、部屋にこもって教科書を探し出し、魔法の訓練である。
携帯の中にＴＯＤＯリストはあった。
でもパスワード探し当てるのめちゃくちゃ大変だった。
助ける相手はやはり夏油　傑のようだった。つまり全員救済ってことな。
1．天内　理子及び黒井さんの救出
2．灰原の救出
3．メロンパンの撃破
4．闇の魔術師クラウンの撃破
パーフェクトむりぽ。
これが俺の見つけたメモ書きである。
わかる、わかるぞ、記憶を失う前の俺!!
でも、無理ならなんでそんな縛り結んだし。
そしてクラウン誰やん。

口から出ようと足掻くカエルチョコを無理やり口にねじ込みながら、俺はムーと悩んだ。

とりあえず、伏黒　甚爾を雇えばよくね？

お金がないか。

口座を見ると、凄い大金が口座に入っていて三度見した。

なんでやねん。

あっ　株。あっ　未来知識。なる……。

とらんく

またしてもパスワードと格闘することとなった。
とりあえず日本で最も有名な地震名で検索すると、掲示板から情報が出てきた。
現代知識でオレツエーするなら、ここは踏んでると思った。
災害情報だけ一気に出してるらしいな。
未来人だ、いやエイリアンだ、などと色々予測されている。
そのコメントの一部をコピーし、パソコンで検索する。
出てきましたよ、覚書のファイルが。
パスなどの一覧表も同じ場所から見つかったので、早速照合していく。
しかし、禪院甚爾の連絡先がわからん。
しかもあれよね。下手に甚爾の救済すると、恵が大変なことになるよね。
あれって、依頼の上書きもどうなんだろう。裏社会のルールとかもありそうだし。
そもそも、星漿体って助けていいもの？　助けない方がいいんじゃあ？
でも、同じ知識を持っている俺が、助けるって判断をしたんだよな。
じゃあ、それに従うしかないか……。

くそっ　どんな縛りを結んだんだよ。
んー。逆に天内　理子の誘拐なんてどうだろう。
引き渡し日時を一年後辺りにしてしまって、後は高専に送り届ければ良いのだ。
あとのことは知らない。
それにしても、やはり連絡先を知らないということに戻ってくる。
五条　悟に聞く？　禪院家に行く？
駄目だ、雑魚の話を聞いてくれる未来が見えない。
服従の呪文使っちゃう？
やる事がいっぱいでオーバーヒートしそうだ。
そうこうしている間に携帯で呼ばれてしまう。任務だ。
「いくぞ、雑魚」
「えっ　単独任務じゃないんですか。等級合わないと思うんですけど」
「それでいつも単独任務で、挙句記憶喪失だろ、慣れるまで俺が一緒に行ってやるよ」
「あ、ありがとうございます。五条さん」
破格の扱いなんだが、実験が出来ないんだよなぁ。
雑魚雑魚言われる未来しかないけど、しょうがないね。

というわけで、車に乗ってやってまいりました。廃墟！
一応、事前に呪力の操作は訓練してきましたよ！
「てやっ」
スカッ
「はあああー。ダメダメ。てんでダメ。お前、どうやって呪霊狩ってたの？　２級どころか、適正値４級だろ。この前の２級、どうやって狩ったんだよ。空き時間もずっと料理作ってて訓練しないしさぁ。まーチョコは美味いけど」
多分魔法で。そして蛙チョコバカにすんな、美味いんだぞ。えっあれ、俺が作ってたん？　すご。
「等級下げるのどうすればいいですか？」
「そこは以前の級を取り戻せるよう頑張れよ！」
そういうわけで、危ない時は助けてもらいながらヒイコラ言って呪霊を倒した。
足を引っ張りまくること、２ヶ月。
進級し、一年生と行動する日々。プライド？
そんなものはない。

後は休日に必死こいて魔法界へのアクセス方法を探った。

さて、とうとう天内　理子の事件が起きてしまった。

その時に五条に拝み倒して、天内　理子の懸賞金の載った裏サイトを教えてもらった。

即座に、三倍の金額で黒井とセットで引き渡すように依頼をする。

引き渡し場所は追って連絡する。

これで天内　理子は殺されない。と思う。

後は、五条　悟について。

これは甚爾の方が強いし、後々考えると、頑張って覚醒してもらうしかない。

甚爾の依頼は同化の阻止なはずだし、依頼を投げ出すことにはならないはず。

その後、甚爾はまんまと2人を攫ったので、こっそり合流しトランクへ招き入れ、取引を持ちかける事とした。

「あんたが依頼主か」
「そう。２人とあんたと恵と津美紀を買い取りたい。細かい契約内容はこれ」
「たけーぞ」
「知ってる」
結果、俺は貯金がすっからかんになった。
ずっとトランクに閉じ込めることになるけど、何故かトランク内めっちゃ広いし大丈夫でしょ。
退屈しないようにお仕事もあげよう。ドラゴンの世話とかな（何故かトランクにいた）。
ふう、なんとかなったな。
帰った俺は、裁判に掛けられた。
罪状は、同化の妨害。俺がやった事はバレバレだったらしい。ですよねー。

「だから、このままだと理子ちゃんが死んじゃうと思って、せめてそれはないように生存を条件につけた依頼を出しただけですって!!」
「お前、俺が依頼失敗すると思ってたのかよ!」
「成功する要素がどこに?」

「はあああああ!?　雑魚雑魚雑魚!!」
めっちゃ蹴られたけど、庇ってもらえた。
理子ちゃん?　安全な所に逃したから安心していいよ。
「おまえ、すげー金持ちだったんだな。意外」
「無一文になったけどなー。また一から頑張る」
「どうして、理子ちゃんを助けるのにそこまで?」
「ナイショ」
お前の為だよ、夏油!!

アズカバーン！

ついに来ました、産土神依頼。
なんでわかったかって？　目の前に大暴れしてる産土級がいるからですよ！
「プロテゴマキシマ！　プロテゴマキシマ！　プロテゴマキシマ!!」
とりあえず、自分たちに防御呪文をかける。
「梟先輩!?」
「ステューピファイ！」
効いた！
産土神が止まる。
「お前ら逃げるぞ!!」
補助監督消えてるし！　帳から出れねーし！
「悪霊の火!!」
覚悟を決めて、ドラゴン型の炎を杖から吐き出す。
消すのクッソ大変だけど、そんなことを気にしている余裕はない。
悪霊の火は、産土神にダメージを与えてくれた。

あらゆる魔法を使ってなんとか足止めする。
呪霊を祓って悪霊の火をなんとか消化すると、俺は後輩２人に向き直った。
「ありがとうございます、梟先輩！」
素直に礼をいう灰原。警戒してこちらを見る七海。俺は杖を向けた。
「大丈夫だ、七海。ちょっと色んなことを忘れるだけだから」
「色んなことってなんですか」
「俺、記憶がないからさ。忘却呪文人間に掛けるの初めてになるんだよな。記憶の上では。大丈夫。理論上、この戦いの記憶だけ忘れる可能性もなきにしもあらずだ」
「全く安心できませんね」
「そんなことしなくても、黙ってますよ！」
「信じられるはずがないだろ？」
そして、戦いが始まった。

負けた。

クッソ俺、雑魚すぎ!?

「お願いします、黙っててください。でないと処刑されちゃう」
　俺は後輩2人に土下座する。
「はぁ……。なんなんですか。魔法使いとでも言うつもりですか」
「言うつもりです」
「えっ　じゃあ、どこかに魔法界とかあって留学しに来る子とかいるんですか？」
「それが俺です」
「ええーっ！」
　驚く灰原。頭を押さえる七海。
「なぜこの学校へ……記憶がないのでしたか」
「そう。ついでに言えば魔法界への帰り方もわからん。魔法で暴れればワンチャン魔法奉行所が捕まえにくるけど、そしたら多分、刑務所か秘匿死刑か……。魔法使いの刑務所って、幸せな気持ちや記憶を全部吸われて廃人になるんだよ。最悪、魂を吸い殺される。絶対いや」
「わかりました。黙っています。っていうかいまだに奉行所なんですか、魔法界」
「できるだけ梟先輩の力になりますよ！」
「おお……。ありがとうありがとう。じゃあ、口裏合わせしよっか」
「謎の呪術師が助けに来たって言いますね」

「いや、気絶して気がついたら全て終わってたってことにして」
「そうですね。どんな人が助けにきたかとか聞かれたら困りますし」
「そういうこと。お礼としてお守りと転移できるアイテムあげるから、死にそうな時だけ使って」
「「ありがとうございます」」
そして、七海たちと一層仲良くなれた。気がする。
救助に夏油がきて、無事であることを喜んでくれた。
「無事で良かったよ」
「いや、気がついたら気絶しちゃっててさ。もうダメかと思ったよ、夏油さん」
「夏油先輩、あれは産土級でした……」
「気になるね。何があったの？」
「僕ら、気絶しちゃったから何も覚えてないんです」
「ふむ。すごい焼け跡があるね。残穢も感じない……。一体何が」
「さあ」
ということで、誤魔化してその場はどうにかした。

でも。

「等級違いの依頼多すぎんだろ!!」
「絶対殺してやるという悪意を感じますね」
「こっちも魔法のこと言えないのが痛いよね」
「マグルに呪いを掛けたい……。魔法奉行所に捕まってもいいから呪いを掛けたい……」
「落ち着いてください、先輩」
七海と灰原はなれたもので、最初はドン引きしていた蛙チョコと紅茶をいただいている。紅茶を入れてくれたのは黒井さんで、理子ちゃんと甚爾さんとお茶会である。津美紀ちゃんと恵くんはお昼寝中。
彼らの面倒は一生見る所存。だって魔法見られたからね。仕方ないね。
「大変じゃな」
「理子ちゃんたちほどじゃないよ」
「妾はいいのじゃ。たまに外に出してもらえるし、ペットの世話で忙しいしの」
「ドラゴンに乗って飛ぶのはいいわ」

「記憶、いまだに戻らないんですか？」
「オブビリエイトで消した記憶は消滅する。もしそれだったら戻らない」
「魔法ってクソですね」
「そんな魔法を掛けようとしてたんですか。いずれは恵くんも出してあげないとなのでは？」
「まあ、困ったら呼べよ。たまには依頼料分の働きをしてやる」
「まじでお願いします」
後は夏油衰弱問題とミミナナ救出問題か。
はっ　ポッケないないしちゃえばいいんじゃね？
もはや３人も６人も同じだよね。
バレたら魔法界の法律的にアウトだけど、でもよく考えてみて。
トランクにいるドラゴン。どう考えても法律違反だから、俺はどっちみち犯罪者なのだ。
ズッ友だね、アズカバン！

俺に触れると火傷するぜ

「つーか、最近等級ミスも多いけどさ。お前らも等級誤魔化してね？」
　いらないことに気づきおって。
「私、抗議したらこれぐらいの等級違いは平気だろうと言われてキレそうになったのだけど」
「俺達も困ってるんです。五条さん、五条家当主なんだから、なんとかしてください」
「しゃーねぇな、じゃあ種明かししろよ」
「それこみで任務振られるから嫌です」
「既にそうなってるだろ」
「ええ……。五条さんが守ってくれないなら、俺、卒業したらフリーの呪術師になります」
「私もそうしようかな……」
「ええ!?　傑は俺と一緒に高専の呪術師になろうぜ！」
「なら守ってやれよ、明らかに攻撃されてるんだからさ……」
　吐き捨てる。おっと素が。

「は？」
「五条さんと近しい人しか等級違いの依頼押し付けられてないでしょ」
「は？　なんだよそれ」
「気づいてなかったんですか？　歌姫さんとか冥冥さんとか俺が接触させないように妨害してる伊地知は無事じゃないですか。悟派と目されて攻撃されてるんですよ。これから夏油さんとか特に猛攻撃喰らうと思います。胸糞悪い依頼とか、面倒な依頼とか、依頼の頻度とか。五条家の権力で守ってあげないと、夏油さんの後ろ盾ないんだから、潰されますよ。確実に。そんですり潰されて死体は盗まれて有効活用されて終わりです。傑さんを思うなら、庇護下に入れるか突き放して五条派閥でないと示さないと。それは俺達もです。五条さんはなんだかんだ庇ってくれたし、いい人だから今まで黙ってましたけど、この辺りが限界です。あまり時間もないし、俺らと傑さんと、付き合い方どうすんのか考えといてください」
「え、何それ」
「五条さんも夏油さんもほんと鈍すぎ。皆、言えないだけでわかってますよ」
「悪りぃ。ちょっと心の整理が追いつかない」
「夏油さんが死ぬまでには腹決めてくださいね。そう時間ないと思うけど」
「悟。私はそう簡単には潰れないし、君の保護がないと生きていけないなんて情けない

ことは」
「夏油さんは派閥舐めすぎです。俺らだって何度死にかけたかわからないし」
「梟！」
夏油が責めるような声を出す。五条は戸惑っていた。
「灰原と七海は、卒業までは俺がなんとかする。俺にできるのはそこまでだ。夏油ぐらいは守れよ。巻き込んだ者の義務だ」
俺は踵を返して逃げた。

翌朝。
悟は真面目な顔で、俺に話しかけてきた。
「……梟。傑の任務、確認した。俺が馬鹿だった」
「うん」
「僕が力を得るまで、雄と健人と傑のこと、頼んでいいか」
「しょーがないな。……って、え？　夏油さんも？」

「僕は内から、傑は外から、力をつけるって約束したんだ」
「え？　でもそれ、俺関係ないよね？」
「これからよろしく頼むよ、梟」
「は？」
　そして、俺は気がつけば夏油と共に事務所を立ち上げる事となっていた。
　楽しそうに立ち上げる事務所について相談する最強コンビの笑顔、プライスレス。
「あ、あのー。それで五条さんはいつ力を得るんですか」
「悟でいいよ、敬語もいらねー。そうだな。１０年後だ。１０年したら、戻ってきてくれ。傑」
「いい加減にしてくれるかな!?」
　最強コンビの笑顔、プライスレス……（押し切られた）。

「で、種を教えてくれよ。どうやって等級違いを生き延びたんだ？」
　うーん。このままいくと、というかおそらく原作でも、五条先生の生徒ってバンバン殺されてるよね。

だって原作で影も形も見えないもの。
あーもう!!　アズカバン!!　ズッ友だよ!!!（ヤケ）
「有料で分けてもいいけど、絶対誰にも内緒だぞ。直接教えた生徒にしか渡すなよ。おおっぴらに使わないようにもしろ。口止めは縛りでしろよ」
「わかった。縛るよ」
縛りを結んだので、俺はお手製の魔法のお守りを見せた。
魔法は体が覚えているのと、猛練習したので結構難しいこともできるようになっていたのだ。
お守りを発動させると、五条は目を見開いた。
「なんだよ、これ。六眼で見えない……!!」
「俺が裏から仕入れた道具だ。こういうのも世の中には割とあるから六眼を過信しちゃ駄目だぞ」
「俺も仕入れたい。仕入れ先教えて」
「誰が言うか。数が限られてる上にすごく高価なことは言っとく」
「わかってる」
「その上で無料で譲るから、俺の頼みは最優先で聞いて」
「……ふぅ。俺って、何も見えてなかったんだな。いいぜ、梟」

「あと、全力でサポートはするけど、表向きは違う事務所ってことにしたい」
「なんで」
「俺、割と危ない橋渡ってんの。同じ組織って事になると、もしもの時、ヤバい」
「……いいよ」
「よくねぇよ」
「あんまり、私を惨めにしないでくれ。梟を利用しておいて、自分は安全圏にいるなんて私は嫌だ」
はあ。灰原や七海も、ついてくるって言ってくれてんだよね。
「仕方ねーな！　そんな傑と悟にとっておきの情報やるよ！」
「何？」
「羂索って呪詛師がいて、んー。メロンパンの方がわかりやすいか？　脳みそで体を移動するタイプの術式なんだけど」
「は？　そんなのいんの？」
「しかも最低１０００年は生きてる」
「はああ!?　そんなの呪霊じゃないか」
「そいつ、昔、五条家ってより、六眼持ちに煮湯飲まされたらしくてさ、ずーーーーーーーっと五条家、特に六眼が生まれるとすぐ刺客放ったりして殺して

きたらしい。悟も覚えあるだろ。懸賞金とか。で、そいつ、嫌がらせと術式狙いの実益兼ねて、傑の体狙ってくるかもしれない。裏取りはしてもいいけど、慎重にしろよ」

「何でそんなこと知ってるんだ?」

「奴は多くの術師と縛りを結んで呪具にしてるからな。邪の道は蛇。俺って、結構イケない人だからな。惚れるなよ?」

キメ顔で言ってみた。ツッコミ待ちだったのだが。

「「梟……」」

うっわキラキラした目線が痛い。

「梟がいれば安心だな!」

「そうだね」

うっわハードル上げすぎた……。

巣立ち

ミミナナは無事保護した。
暴れようとする傑を止めようとするのマジ大変でした。
あと、ようやく悟呼びと傑呼びに慣れてきた。
監禁仲間が増えたよ、やったね！
ま、まあ原作でも学校行ってなかったっぽいし大丈夫やろ。
小さな事務所を開設して、身内だけでささやかな事務所の開設祝いをした。
狭いんじゃないかと何度も聞かれたけどスルーです。この間取りとこの広さがベスト。
しかもなんと、お菓子屋さんを併設である。これには子供組も大喜び。
いつでも呪術師やめる準備は整えとかないとな。
形だけ歌姫先輩や冥冥先輩、夜峨先生も呼び、お祝いをした。
さて、悟と傑、七海、灰原、俺、ミミナナと揃ったので、トランクを出す。
「悟。傑。これから見ることは誰にも言わないと縛ってくれ。あと、悟は誰も入れないように帳を」

２人が緊張して頷いた。
俺はトランクを開ける。
「なんだこれ、階段？　嘘だろ」
「これは……事務所が狭くていいのはこれが理由？」
「ついてきな」
俺は階段を降りていく。
そこには、パーティの準備をしていた理子ちゃんと黒井さん、競馬新聞を読んでる甚爾さんと津美紀ちゃん、恵くんがいた。
ケーキがもぞもぞ動き、蛙チョコがぴょんぴょん飛んでいる。
「もう準備はできておるぞ！」
「じゃあ、始めましょうか」
理子ちゃんが笑顔になり、七海が紅茶に手を伸ばす。
俺はぽかんとする４人を振り向いた。
「ようこそ、悪い魔法使いの隠れ家へ」
その言葉に、４人は起動する。
「すごい。カエルさん、動いてる」
「すごい。ケーキさん、踊ってる」

「なにこれすげぇ！」
「悟、あの侵入者が……」
「甚爾さんは今、俺に雇われてるから大丈夫」
パーティは盛り上がった。
「俺もここに住む！　俺も事務所に移籍する!!」
「五条家当主を巻き込めるかよ。こっちは闇の魔法使いクラウンとの抗争真っ最中なんだ。記憶はないがな」
「なんだよそれ、すげーワクワクする！」
「ワクワクするじゃねーよ。お前もメロンパンと抗争中だからいいじゃねーか」
「悟！　悟、ドラゴンいた！」
「マジで!?」
「聞いてねーな……」
キャッキャキャッキャとはしゃぐ最強コンビ。その笑顔、プライスレス。
色々巻き込まれて大変な思いをした七海と灰原だけど、それをみて頬を緩めている。
本当、悪い人じゃないんだよな。最強コンビ。
こうして、事務所は開設された。
派閥に入れって誘いとかめっちゃ来たが、丁重にお断りした。

等級デタラメの依頼とか来るけど、甚爾さんか傑が行くか緊急対応できる体制を整えれば何の問題もない。
パタっと仕事が来なくなってもお菓子屋さんがあるし、株やってるし。
七海にも手伝ってもらってる。
原作知識から、七海が凄いの知ってるからね。
大量の依頼が来たら断ればいいし。フリー最高だな!!
夏油は仲間の勧誘に精を出しているし、灰原はお菓子作りが上手くなった。
俺ら、結構いいチームできてるじゃない？
むしろ、悟の手伝いを結構してるまである。
悟は強メンタルすぎて気付いてなかったけど、過労死させられかけてたのは悟もなんだよなぁ。
なので、しんどいと思った時はバンバンこっちに依頼投げてくるようになった。
たまに研修も投げてくる。いい加減にして。
でも、一度依頼投げすぎと怒ったら、熱で休みたくて悟にきた1人ぶんの依頼を投げただけだったのを聞いて少し悟に優しくするようにした。5人でもきつい依頼を1人でかよ。

そんなおり、真剣な顔をして傑が話があると言ってきた。
「梟。学校は行かせるべきだと思うんだ」
「いいけど。でも恵、禪院家に狙われてるから、送り迎えと五条家への後ろ盾のお願いは傑がしてね」
「ああ、わかったよ。悟に頼んでおく」
すぐに禪院家から抗議がめっちゃきた。探していたらしい。
文句は全て五条悟にお願いします。

過去

『なんか、お前の担当っぽいの（魔法生物）がいたんだけど』
「あー。じゃあ俺が対処する。補助監督は断って」
『じゃあ、そっち回しておくわ。それと特級の推薦来てるけど』
「お断りしておく。甚爾さんの力なのわかってるだろ」
『お前も十分強いと思うけど……わかった。こっちからも妨害しておく』
うーん、しかし大変そうだ。五条派を増やしたいけど、そしたら危険に晒される。
恵なら、と思うけど、恵も結構危ない目に遭ってるんだよな。ブラックブラック。
呪術界に安全地帯などないのだ。
うちは一年に一度、一週間の大規模休暇を義務付けていますが何か？
これって呪術界では革命である。なんというブラック具合。
なお、悟もこの休暇システムに入れてるし、五条家も休暇システムを取り入れてる。
取り入れさせた。
その間、回せない依頼はこっちで回す。
当然、悟の時は凄く大変だけど、凄く喜ぶから続けている。

あと、悟にまわされた依頼の呪霊を甚爾が軽率にぶっ飛ばすので、甚爾の株はゆっくり上がっている。

これだけの依頼をしてゆっくりというのがアレだけど。

悟に頼まれ、硝子の休暇も用意させられた。

高専の怪我人は「はんてんじゅつしき」と書かれた薬を飲むのだ……。持ち帰り不可。

休みをもらった硝子は三日ぐらいずっと寝てたらしい。苦労してんな。

たまには同級生組でのんびりしたらと言われ、硝子をトランクに誘ったらガチ泣きされた。

事務所の開設祝いにも呼んでもらえず、凹んでいたらしい。

ごめん。まじごめん。高専から出られないの当たり前とはいえ、酷かったよね!!

正直うっかり忘れ……硝子には土下座である。なんでも欲しい魔法グッズ言ってください!

残りの三日は同級生組で魔法で遊びまくり、最終日は遊園地に行った。

悟は初めてだったらしい。俺は周囲をもっとよく見るべきだな……。本当にすまない。

さて、その後当然圧力が掛かった。

薬を用意しろ？　無理ですね。大体、俺達が硝子に癒してもらおうとしたら高専関係

者以外への治療禁止って妨害してきたじゃん。じゃあ俺らも協力する義理ないわ。
話が逸れた。魔法生物退治である。っていうかアクロマンチュラじゃん。
ハリーポッターで出てきたヤバヤバのヤバな生き物である。巨大蜘蛛。
現場に急行して、帳を下ろす。
「やっぱいな」
蜘蛛もやばいが、マグル避けの呪文が掛けてあるわこれ。
警戒しながら向かう。
「ぐっ　ここまでか……！　逃げてくれ、咲也！」
「先輩!!　先輩を離せ！　ああっ」
魔法使いが2人捕まっていた。
「あー。助けは必要か？」
「お前は……！　闇の魔法使い、ダークオウル（闇フクロウ）!!」
「これはお前がやったのか!?」
「いや、違うし」
それにしても、偽名の意味とは。
サクサク2人を助け、2人以外に人がいないことを確認し、悪霊の火で焼き払う。
「さて、俺はお前らの命の恩人というわけだ」

「……何が望みだ」
「闇の魔法使い、クラウンについてと魔法界への入り口を知りたい。記憶喪失でな。闇の魔法使いクラウンを倒すということしか覚えてなかった」
魔法使いたちは驚愕の声を上げた。
「実は、ダークオウルは俺たちの仲間だったんだ！」
「いや、流石に騙されねーからな？　記憶喪失だからって舐めてんのか」
「残念だ……」
「せ、先輩。魔法界について教えちゃうんですか？」
「……よし。クラウンを倒す事が目的といったな」
「そうだ」
「協力してくれるなら、協力しよう。ただし、こっちの願いも一つだけ、可能な時は聞いてほしい。……いや、改心して魔法庁に忠誠を誓うなら、口利きもしてやる」
「望みを一つ叶えるのはいいが、俺は日の当たる場所へはいけないよ」
「そうか……」
ということで魔法界への入り口とクラウンの企みについて聞いた。
これで魔法グッズが栽培するもの以外でも作れる。やったぜ。
クラウンは、魔法界と現代社会の融和を目指しているらしい。

完全に俺の思想と一致するんですが、それは……えっ？　俺ってクラウンの一派だったの？

俺に何があったし。

そうだ、高専に行こう　前編

「魔法界行きたい！　行きたい行きたい行きたい行きたい!!」
ぴゃあああああと泣きじゃくるミミナナ。
トランクの中で、俺は色々と準備をしていた。
津美紀は涙目だし、恵は無言で訴えている。行きたいと。
灰原は楽しそうで、七海もちらちら見てくるのが隠せていない。
「危険だからだーめ」
そういって、プロテゴのお守りを一つ二つ。
そして、いそいそと準備する男が2人。
「いっぱいお土産買ってくるからね」
「なんでいく気満々なのかな、傑、甚爾」
「そんな……！　連れて行ってくれないのかい!?」
「ゼッテーついていく」
「罠の可能性もあるんだし、ダメに決まってるだろ……」
「ずるいぞ連れてって（罠ならなおさら）！」

「本音と建前逆ですが？　……本格的に犯罪者だとわかってさ。しかも、犯罪者と敵対してて、今も俺の思想は犯罪者より。仕方ないだろ」
「仕方なくない！　私は自分の身は自分で守れるよ、君が心配なんだ！」
「ドラゴンよりは弱いんだろ、魔法使いの奴ら」
はああ。
「まじで邪魔するなよ？」
ということで、２人を連れて魔法界に向かった。
いざ、ショッピングである。
欲しい物は色々ある。
目を輝かせながら、あと、２人に注意しながら店を回っていると。
「クィディッチのチケットが販売、だと……？」
……欲しいものは、色々ある。

「行けー！　がんばれー！」
「わあああ！　がんばれー！　がんばれー！」
「猛虎チームに百ガリオン！」
　箒が、ボールが激しく飛び交うのを応援する。
　魔法界の観光といったらやっぱりこれだよね！　クィディッチ万歳!!
　傑も甚爾さんも楽しんでくれている。
　１００ガリオンの資金源は後で問い詰めておかないと。
　散々騒いで、バタービールを飲み、たっぷり魔法界の軽食を食べた。
　大満足でクィディッチ会場を後にした。
　ところで、お分かりだろうか。
　クィディッチは場合によっては三日もかかる競技である。
　お分かりだろうか。
「夏油様ああああああ！」
「夏油様、心配しましたあああ！」
「戦闘でもあったのですか？」
「治療薬出しときました！」
　泣きついてくる子供達。睡眠不足で目を真っ赤にした大人。俺は静かに土下座した。

さて、悟も心配していたそうなので、お土産持って高専に任務をもらいに行きますかね。

高専に入ると、授業中に関わらず、悟が転移してきた。

「梟！　傑と大人の階段登ったってマジで!?　俺は？　俺は!?」

「人聞きの悪いこと言うな!!　泡たっぷりのノンアルコールビールで酒盛りしただけだから!!　大人って泡が髭みたいになっただけだから！」

「だから俺は!??」

「はぁ……。悟と硝子の分はちゃんと用意してあるか「これ!?」」

手提げカバンに手を入れると、そのカバンごと強奪された。

「ちゃんと補助監督と先生方にも分け「わかってる!!」」

「はいはい」

「せんせー！　俺らもノンアルビール欲しいでーす！　ヒゲはやして大人の階段登りたーい！」

「お、おい」

元気な生徒が窓から顔を出して声を上げる。それを別の生徒が止めている。

俺は笑顔でそれに応えた。
「おー！　飲め飲め、いっぱいあるから！　ただし放課後な！　安心しろよ、本当にアルコールないから」
「あ〝？」
「あ〝？　何威嚇してんだよ、まさかお前生徒を怖がらせてないよね？　ちゃんと可愛がってやってる？」
悟が生徒を威嚇したので頭ホールドしてさらに威嚇する。
「ちょうどいいから、授業参観していってやんよ」
「ああ？　みてろよ、俺の完璧な授業っぷりを」
そうだ。悟の成長イベント潰しちゃってるんだから、気をつけるべきだったな。

ズカズカと乗り込んで、教室で見学。

うん。

うん。

いい先生してるじゃん。安心した。生徒が戸惑ってるように見えるけど、気のせいだろう。

「さすがだな！　超いい先生じゃん！」

「僕、最強だから」

ふふんと笑う悟。

放課後、一年生の教室に続々と生徒達が集まった。

準備のいいことに、つまみを持ってきてくれた。

悟は鼻歌を歌いながら、バタービールと魔法界のお菓子で常識的なものを出していく。

「ん、これだけ？」

「それは高専と五条家に配る用。悟と硝子にはまた別に、な」

関係各所にお世話になっていると、気を使うのだ。

「体がぽかぽかするー」

「せんせー。ヒゲがｗｗｗ」

「ほんっとお前勇気あるな！」
「大人の階段登ってしまいましたね」
「梟さん、毎日授業参観に来てください」
「お願いします」
「そんなことしなくても、悟は毎日優しい良い先生だよな？」
「え？」
「これから傑と交代でしょっちゅう遊びに来ようかな。生徒に悟先生の話聞きに」
「がん、ばる」
悟がいう。当初と比べたら、まー可愛くなっちゃって。
お守りや回復薬筆頭に魔法グッズの効果すごいな！
「でもご褒美欲しいなー」
「今年の連休、硝子と傑と悟と俺で、すっごいとこ連れてってやる」
「絶対だぞ！　仲間外れは許さないかんな！」
硝子と悟が両側から身を乗り出す。
がしゃんと音がして、開き掛けたドアの隙間から傑が荷物を落としたのが見えた。
「わ、私を抜きにして梟が悟と硝子とラブラブしてる……？」
「あーもー。傑も来い来い」

そして同級生ハーレムが完成する。

愛の妙薬は使ってないからね？　ドラゴン様様である。俺がいないとドラゴンとかとも会えないからね。

「梟さんって何者……？」

「術式なくて呪力が少ない人の希望みたいな人です。ちなみに一級ですが、実際に倒しているのは天与呪縛で呪力がない甚爾さんって人です。いっそ補助監督になりませんかってラブコールは送ってるのですが」

まあ、応じないよね。

キラキラした目で伊地知に見らているが、ごめん。俺、その代わり魔法が使えるんです。

そうだ、高専に行こう　後編

お土産配り完了。

「大人の階段登っちゃった」は呪専で流行りそうです。

ちょうど肌寒くなって来た時期だし、バタービールは好ましく受け入れられてよかった。

体があったまるんだよね。

伊地知にどこに売ってるか聞かれたので内緒と答える。

また買ってきて欲しいそうだ。もちろん良いぞ。

そして、悟の部屋で会合である。

「まだはっきりした証拠は手に入れられてないけど、お前の言ってるの本当かも。メロンパン。なんていうかさ、俺、諦めてたんだ。懸賞金とか掛けられて、雑魚がなんか吠えてるって、命を狙われるのが当たり前って、世界が敵だって、キリなんてなくて当然って。でも、違うんだ。そんな世界なんて有耶無耶な物じゃない、警戒すべき政敵がいる。

そうわかった時、凄くスッキリして、安心して、戦う気が起きたんだ」
悟は自分の手を握ってそういう。
力になれて本当に良かったと思う。
「悟……。私も力になるよ、悟」
「しっかし、あんたもとんでもない爪隠してたね。未来視も魔法？　株で大金稼いでるのそれだろ」
「それほど絶対なもんじゃないよ。で、悟。狩れそう？　後は頭に継ぎ目のある奴で、受胎九相図の父親で、最近は虎杖って女に入ってるらしいって噂ぐらいしか知らないけど」
「まじで？　探してみる」
「悠仁って息子がいるはず。慎重に探れよ。ヤケになられたら面倒だ。縛りで自力で呪霊操術もどきができるやつだし、１０００年生きて呪詛師やってんのは伊達じゃない。呪物とかその器となった者とか、わんさかいる」
「はー。メロンパンも凄いけど、それを調べられる魔法使いってすご。悪の魔法使いってマジ？」
「まあね」
「……何か、悪いことしたのか？」

なんでもないように聞くが、少し緊張しているのがわかる。
俺はしっかりはっきりキッパリと言ってやる。
「ドラゴンを飼うのはアウトだろ」
「「確かに！」」
「あと、魔法を魔法使い以外に見せるのもアウト。使うなんてもってのほか」
「「確かに！」」
「その辺、呪術規定があるからわかりやすいだろ？　覚えてない時に他に何かしたかもだけど、知らない」
「まーな。まごうことなき犯罪者だわ。心の底から納得した。大犯罪者じゃん」
「恩恵に預かってる私はノーコメントにしておくわ」
「私達は魔法使いじゃないからね。こっちは仲間作り、順調に進んでる。それで……」

悟と傑の情報交換に耳を傾けつつも、悟と硝子用のお土産を出していく。
そうなんだよな。メロンパン排除しても、呪物や器なんかが問題なんだよな。
蛙チョコを筆頭に魔法のお菓子や……魔法のアイテム、魔法の薬。
「動物模倣ビスケット？」
「ああ、それ？　動物の鳴き声が食べた直後に真似できるってだけなんだけど、不評で

ね。口止めするなら生徒にあげちゃっていいよ」
「わかった」

「今日は問題間違えたら、罰ゲームあるよー」
楽しげに五条先生が告げる。
「えー!?」
数少ない生徒たちはざわざわとした。昨日、急に優しい先生になったと思ったらこれである。
もしかして、優しい教師をした反動か。
「間違えたら、呪術界の闇市で大人気なこのビスケット食べてね。あ、人に喋ったらマジ

ビンタ」
「せんせー！　ご褒美ですか!?」
「やばい薬でも入ってるんですか!?」
「洒落になんねーだろ……」
「がんばれー。でもバンバン間違っちゃっていいよ！」
鬼か。生徒達は頑張ったが、授業はいつもより難しい。やはり鬼か。
生徒の1人が間違えた。
「じゃあ、ビスケットひとつ取って、食べたら鳴き真似ね♡」
「は、はい」
恐る恐る猫のビスケットを食べる。鳴きたいという衝動が湧き上がり、抑えきれない。
「にゃあああん」
生徒の顔が猫になり、猫そのものの声をあげる。
その後、すぐに元の顔に戻った。
「あっはっは！　かぁわいいー！　じゃあ、席に戻っていいよ。次は誰に当てようかなぁー」
「俺俺俺俺！　頑張って間違える!!」

必死で手を伸ばす生徒が約1名。
「ちゃんと真面目に答えないと駄目だよ。どのみち、この授業が終わったら余ったビスケットあげるからさ。そうだ、正答したら僕の分もあげる」
「先生大好き！」
「信じて縛りはしないけど、このメンツ以外に見せちゃダメだよ？」
そして、授業が終わった後、お菓子を小分けして生徒達に配った。
先程の生徒は正答したので小さなティシュ包みが二つだ。
「センパーイ!!」
生徒はビスケットを捧げ持ち、教室を飛び出していく。秘密とは。
「あっ　こらっ　見せちゃダメって！　あーあ。ま、いいか」
「せんせー。闇市俺らも行きたいです」
「危険だから、だーめ。というか、僕も連れてってもらえないんだよ」
「持ってきてくれるの梟さんですよね？　何者なんですか梟さん……」
「不思議な奴だよね。でも悪い奴じゃ……ないってこともないけど、優しいところあるよ」
柔らかな声で言う。この男、顔と声はめちゃくちゃいいのだ。
それにこう見えてたまにこういう不思議グッズや何よりお守りをくれるので、こう見

えて五条先生の生徒人気は高い。

雨の日に捨て猫を助ける不良か。不良だったわ。

なお、この後休暇で魔法使いのお店に連れて行ってもらい、生徒達にマウントをとってイラッとさせるのだが、それは別の話である。

魔法界

連休の少し前。
硝子と悟、傑を前に俺は演説していた。
「思うに、俺は幸せな記憶が少ないと思うんだ」
「俺らとの思い出は？」
ショックな顔をされたので、慌てて付け加える。
「魔法使いにとって幸せな記憶は消耗品兼盾だから、たくさん必要なんだ」
「ディメンター？」
「それもあるけど、守護霊呪文もある。守護霊呪文とは、幸せな記憶を動物型の霧にしてディメンターから身を守る呪文だ。それのためには、とびっきりの幸せな記憶がなければならない。つまり」
ゴクリ、と3人は息を呑む。
「超ハイパーデラックス楽しい5日間（前後の1日は休憩用）の旅にするぞ、皆!!」
「「わあああああああ！」」
バンっと事前に用意したパンフレットを並べる。

「さあ！　好きなコースを選ぶんだ！　３人で多数決な」
「そうだね。これとこれは飽きたし、ゆっくり景観の良い場所を……なんでもないです」
「傑は良いよな！　やっぱり俺らも事務所に……」
「やめて」
「トランクもまだ全部は見てないし、クィディッチ見たいし、遊園地もまだ遊びきれてないし」
「俺もクィディッチ見たい！」
うんうん。俺もクィディッチは好きよ。
と言うことで、予定を立てていざ連休へ！
あ、魔法界、ミミナナ達は順番に連れて行ってあるよ。
なので今回は我慢……我慢……

ミミナナがワっと突っ伏し、津美紀が目薬を目にさしてスカートを握りしめてプルプルし、恵が俺のズボンにピトッと顔をくっつけた。我慢できないみたいですね。こいつら、泣き真似を覚えやがったんだよな。
「子供達は私と灰原で見ますよ」
「だいぶ慣れてきたし、待っている間、目立たず観光することなどおやすい御用じゃ！」

「そう言うことでございます」
「俺は絨毯レースに行く。この時期だったら事務所閉めても行けるだろ」
はぁ……。
「じゃ、ちょっと足を伸ばして皆で本場イギリスのクィディッチと箒レース見にいく？
それなら傑も楽しめるだろ。２人とも、パンフレット作り直すから回収な」
皆は歓声をあげた。
なお、英語は重点的に教えたので、子供組含め全員ペラッペラである。

その後、二泊三日でイギリスで遊び、１日は日本の魔法界でショッピング。残りは遊園地。
教師と生徒が学校を休む暴挙で楽しい思い出を作りまくった。
甚爾さんは箒レースを堪能したし、傑と灰原はイギリスの触れ合い魔法動物園で楽し

んだし、悟は怪しげな道具、硝子は怪しげな薬を買ったし、子供達は魔法のお菓子や悪戯グッズをしこたま買い込んだし、黒井さんと理子ちゃんは服を色々買っていた。七海は本屋さんに釘付けだ。日本の魔法界の本屋にも後で連れて行ってあげた。皆とても楽しそうだった。

もちろん、トランクの中での宿泊も硝子と悟は堪能した。

「梟、結婚して！」

「はいはい、目にはドラゴンしか映ってないのわかるから」

そして、帰ったら、怪我をした魔法使い２人が部屋で治療をしていた。

「お前達は、あの時の闇祓い」

「闇祓いって？」

「奉行所で働く人をそういうの。犯罪者は闇の魔法使いで、それを祓うから闇祓い」

「ダークオウル……！　クラウンと並ぶ天才魔法使い！　どうか力を貸してくれ！」

「あー。話は聞くだけ聞くよ。一回は助ける約束だしね」

「俺も聞く」

「悟は仕事がめちゃくちゃ溜まってるだろ。他のみんなも、これは俺の領分だから、散った散った」

なにせ、この業界はブラックなのである。

わあっと散って、黒井さんと理子ちゃんだけが残った。
黒井さんが美味しい紅茶を淹れてくれる。
俺は自分が思う格好いい座り方でキメ顔をしてきいた。
「さて、要件を聞こうかな？」

クラウン

「記憶喪失の割には自信満々だな」
「実は、クラウンが、大変なことをしようとしているのです」
「人間界を支配しようとか？」
「その通りです」
「は？　馬鹿じゃね？　マジで？」
　それは１０００年ほど時期が遅すぎるというものだ。
「クラウンは、お前というストッパーを失い、暴走してるんだよ」
「そうです、なんという非道な行い！　絶対に許してはなりません。マグルを守らなくては！」
「別に守らなくても嬉々として迎え撃つだろ。いつかは表に出るにしても、そのやり方は最悪だ。魔法使いの迫害が絶対に起きる」
「そこが、お前とクラウンの違いだ。クラウンはマグルを下に、お前は上に見るが故に魔法界をあらわにすることを目指した。やる事は同じでも、求めるものは支配か隷属か。正反対というわけだ。皮肉なものだな。お前は魔法使いの名家、向こうはマグル出だと

いうのに」
「互いに利用しあっていたお前達だが、マグルの少女にお前が恋をした事で全てが変わった」
「マグルの少女？」
「その少女の最期の願いの為に、お前は魔法界を捨てて雲隠れしたんだ」
「願い……まあ、予想はつくが」
「惚れたマグルを……夏油　傑を助けて欲しい。全く、恋の病は身を滅ぼすというが」
「俺は、その少女を守れなかったんだな」
「クラウンに殺された。そして、お前はクラウンに罪を着せられて、指名手配された。いや、お前は自分で冤罪を被ったんだ。自分が少女を殺した。自分は今からダークオウルだと。そして、呪霊を見る目を少女から奪ってものにした」
「そう、か」
「何を思って日の当たるところは歩けないと言ったのか知らない。記憶を失っていたから、生きていくのに手を汚してしまったかもしれない。でも、叙情酌量の余地は十分にあるし、少なくとも記憶を失う前は、お前は犯罪者ではない。胸を張っていい」
　だが残念ながら俺は大犯罪者である。
「クラウンの計画が、いよいよ始動しようとしています。魔獣による百鬼夜行を起こす

つもりなんです」
「ひゃっきやこう?」
「そうだ。既にパーティーの招待状も奉行所に届いている」
「来る日は」
「１２月２４日」
　遮るように言う。
「巡る因果が俺に突き刺さってきたか……。ならば、クラウンは死体も残さず燃やさないとな」
「では!」
「なんとかしよう。なんとか出来る。だが、一つ条件がある」
「なんだ」
「魔法界を隠す事はしない。むしろ、公にするよう俺は動く。だから、何があろうと記憶の錯乱や削除などの隠蔽工作は必要ない」
「わかった」
「先輩!?」
「みんな、わかってる事だよ。ずっと隠れるのは無理だ。記憶喪失なのは不安だが、それでもダークオウルはその為に人生を捧げてきた。それを信じよう。頼んだぞ、ダークオ

ウル。いや……尾田　延永」
「誰？　パチモンみたいな名前だな」
「ああもう、お前の名だ、締まらないな！」
　打ち合わせをして、なんでもないように言う。
「そのマグルの写真とか名前は？」
「夢野　小鳥」
　写真の中、手を振っているのは、なんの変哲もない、いかにもオタク然とした女だった。
　魔法使い達が帰った後、俺は天内に抱きしめられた。
「可哀想なのじゃー！　切ないのじゃー！」
「恋人を寝とった人を守るために、うう……。夏油さんからそんな話は聞いたことがないので、一夜の恋人にされてしまったに違いありません」
「最低じゃな、夏油！」
　夏油　傑に熱い風評被害が降りかかる！

小鳥

「傑はそういうことするタイプじゃないし、タイプだったとしてもこんなオタクに手を出すなんてありえないよ。断言していい、傑はあの子を知らない。あの子はただの傑のストーカーだよ」
「こんなオタクって、好きだったんじゃろう？　そんな言い方……」
「記憶が戻ったのですか？」
「何も覚えてない。覚えてないけど。この世で俺だけは、そいつをそんな奴って言っていいんだよ」
　そう言って、写真を撫でる。自分でも、優しい目をしているのがわかる。
「二度目の一目惚れか。そうじゃろ？　そうなんじゃろ!?」
「そういうのじゃないけど……。何があったのかは、予想つくよ。ああ、見えるようだ」
　きっと、出会った時から、彼女は夏油だ五条だとキャーキャー言ってたに違いない。腐女子だったのかも。それも十分にありえるな。うん。そこに、恋愛はなかったに違いない。でも、強烈な仲間意識はきっとあった。
「きっと、俺は彼女に振り回されてた。好きな子とか、話し合って。秘密を打ち明けて」

『私、オリ主なの！　だから夏油様を救わなきゃ！』『じゃあ俺は理子ちゃんかな。俺もオリ主だし』

『あんた呪力ないでしょ』『でもハリポタ魔法使えるぜ』『ファーｗ　何それチート！』

そうやって、ふざけ合って、たまに、転生した不安や弱音を共有してたに違いない。

「これ、小鳥の目なんだな。いろんな物、いっぱい見ないとな。術式引き継げなくてごめんな」

何故だろう。涙が、ポロポロと溢れてくる。

「ああ、梟！　梟、妾が夏油をぶっ飛ばしてやる！　天誅じゃ！」

「だから、傑は関係あるけど、全く関係ないって」

そうだ。これはきっと、俺と彼女の物語。

だから、終わらせよう。彼女を火葬して。綺麗なままで終わらせてしまおう。

物語はめでたしめでたしで終わらせねばならない。

「傑には、百鬼夜行の迎撃を頼まないとだし、怒るの禁止。傑の予定は？」

「夏油さんと五条さんと甚爾さんは三日ほどノンストップで依頼です」

「手が空いておるのはお主ぐらいじゃぞ」

「最近、恵くんだけでなく甚爾さんも返却を求められているくらいですから」

……やれやれ。呪術界って、本当にブラックである。

三日は準備と株取引と書類整理でもやっておくかな。

その日、夢を見た。

『だから、クリスマスに2人の愛は完成するの！　それ以降は全て蛇足なの！　それはそれで素晴らしいラブストーリーだと思うけど、プラスウルトラ！　私はプラスウルトラが見たいわけよ！　わかる!?』

『うん、腐ったものは大事に蓋して隠しておけ？』

『そう、あなたならそう言ってくれると思ったわ!!　ラブイズ世界を救う！』

『今のなんて訳したの？』

『五条先生と夏油先生のラブを隅っこから見守る……これが私のジャスティス!!!』

『どんな正義だ』

『そういうことで、作戦を考えたのよ！　まず虎杖母を襲うでしょ……』

『へっぽこなお前がメロンパン様を倒せるというならやってみろよ』

『そこは尾田がいるでしょ』

『呪霊見えませんが？』

ああ、やっぱり。奇跡って、あるんだな。

枕は涙でびしょびしょだったが、これ以上なく爽快な気分で俺は目覚める。

「さ、やりますか！」

「ということで、傑が梟の女を寝取ってた件について！」

「私に心当たりはないよ!?」

そう言いながらも、ハラハラしている様子である。

「この人です」

黒井さんが、ペラりと写真を見せる。

「ちょっ　やめて差し上げろ」

俺は写真を取り戻す。夏油はびっくりした顔をしていた。

「小鳥ちゃん？」

「は？」
「傑まじで？」
「よく分からない理由で、手ひどく振られちゃったんだよね。その後、行方不明になっちゃって……。そっか。魔法使いの争いに巻き込まれて亡くなっちゃったのか。守ってあげられたら……」
「あ？　俺は死体はちゃんと……ちゃんと、なんだ？　覚えてない」
ぞわり、と体が震える。なんだ。なんだこれ。
そうだ。俺が魔法チートなんだから、あいつが術式チートでもおかしくない。
「つもしも、もしもメロンパンに死体が奪われてたとしたら、俺はっ……」
「術式は？　あー。記憶がねーのか。注意しといたほうがいいかもな」
「そ、そうじゃ！　傑を振ったと言うことは、本命はお主かもしれんぞ！」
「ないわー」
俺は迷わず断言する。あいつにあっても俺はない。そして、同じようにあいつもないだろう。
だってお互いネクラオタクだもの。
「どうして振られたんだ？」
「あー。女に現を抜かす夏油様は解釈違いです、ないです。眺めるのは好きでも眺めら

れるのは嫌いなので見ないでください、だって」
「ファーｗｗｗ　そういう所ありそう。あるわ絶対ｗｗｗ」
「本当に記憶ないんだよな？」
「魂の友だからな。それぐらい、記憶がなくてもわかるわ」
「ラブラブじゃん」
「負けたなぁ。ね、小鳥ちゃんの目、見せて」
「それ、俺も気づかなかった。確かに、言われてみれば違和感あるかも」
　イケメン２人が俺の目を見る。目が！　小鳥の目が眩しさに潰れてしまうからやめてさしあげろ！
「でだ。甚爾さん。傑。俺がなんとか小細工するから、百鬼夜行の対応を頼みたい。ドラゴンは甚爾さんに一番懐いているし、大勢を相手にするなら傑は外せない。悟は根回しをお願いする。呪術規定については、全て魔法だということで呪術の存在は誤魔化す方向でいきたい。悟には説得の為にボガートを渡す」
「「わかった」」
　見てろよ、小鳥。
　楽しい楽しいお祭りを、お前の瞳に余すことなく映してやるから。

お祭り

１２月２４日。
雪が降っている。ホワイトクリスマスだ。
犯行予告がされたのは東京。
俺は、粛々と準備を進めていた。
そして、ついに首都、東京に魔獣達が現れる。
空に、美しい女が大写しになった。
『妾は、マジカルサーカスの首領、クラウン!!　日本はマジカルサーカスに降伏し、支配を受け入れよ!　さもなくば、恐ろしい呪を受けることになろう!』
えっ　クラウンって女なの。
えっ　めちゃくちゃ美人じゃん。
えっ　愛した。
「何ぼーっとしてるのですか」
ポンコツ化した俺に代わり、七海が声を出す。
同じく、魔法道具で俺たちを大写しにして。

『闇の魔法使いの好きなようにはさせません。こちらには日本が密かに擁する魔法省は奉行所、闇祓いと志ある魔法使い達がいます。悪い魔法使いは全員捕縛させてもらいます。ドラゴン使い、それでは現場に急行してください』

さらに魔道具で大写しになる、ドラゴンとそれに跨るローブに身を包んだ甚爾さん。

甚爾さんは軽くドラゴンの背（ドラゴンは巨大なので腹まで足が届かない）を蹴って、ドラゴンを飛び立たせる。慌てて鞍と手綱に捕まる傑。

うむ、２人ともいい笑顔。

２人の後ろをドラゴンが追従する。

追従するドラゴンに乗るのは、俺と七海。ちなみにドラゴンは甚爾か俺のいうことしか聞かない。

『馬鹿な！　ドラゴンを従えるだと!?』

『やってくれる、ダークオウル……!!　我が愛しの君！』

え、俺、愛されてる!?　相思相愛!??

『こちら魔法省！　ドラゴンを許可した覚えはないが!!?　は、はは、ハンガリー・ホーンテール種にウクライナ・アイアンベリー種までいるではないか!!　絶対密猟だろ！　こ、国際問題だ！』

現場に着くと、魔獣を食いちぎっては放り投げるドラゴン達。
『ま、魔法は人を幸せにするものだ！　魔獣に人を襲わせるなど、断じて容認できない！』
『お前にだけは言われたくないわ、ダークオウル!!』
クラウンとは別の魔法少女っぽい子が反論する。
えっ　女の子率高すぎませんか？　戦いにくっ
「ゴースト魔法!!」
ノリノリで叫ぶ夏油。そして呪霊が人々を助けていく。

七海がトランクを開けると、そこから理子ちゃん達が出て、薬で治療に回った。
俺は、クラウンに対峙する。
ほっ　頭に傷はない。
「クラウン。君ならわかるだろ。マグルは素晴らしい。魔法使いはマグルには勝てないよ」
そうして、頼もしい仲間達を見る。
魔法使いならわかる。彼らは魔法使いのふりをしているが、魔法使いではないのだ。

あ、もちろん魔法使い達もボガート退治など頑張ってます。
射殺しそうな目でこちらを見るのはご愛嬌。
「知っていた。知っていたわ、そんなこと。私はマグル生まれだもの」
「……ならば、何故こんなことをした。何故、小鳥を殺した？」
「小鳥、小鳥、小鳥、小鳥!!　もう、うんざりだわ！　ずっと一緒にいたのは私でしょう!?　愛してくれていたのは、私でしょう!?　私とキスしてくれたじゃない!!　好きだって言ってくれたじゃない!!　それなのに、あなたはあのマグルに会った瞬間、あの子の事ばかり!!　大切なことを思いださせてくれたんだって、なんなのよ!!」
「……嫉妬してくれたの？」
「そうよ！　当然でしょ!!　なのにあいつを殺しても、あいつの記憶を奪っても、貴方はあいつの望みを叶え続けた!!　知ってるわよ、あいつは、あのマグルは夏油　傑って奴が好きなんでしょ。マグルの分際で、私は恋愛なんて興味ありませんって感じで、なのに男を誑かす淫売!!」
「や、あいつはめちゃくちゃ恋愛に興味あったぞ。そして隠してはいなかったぞ。キモいくらいに」
「何故？　オブビリエイトでちゃんと記憶を消したのに!!」
「奇跡って奴だな」

「憎らしい。妬ましい。疎ましい!!!　あいつのいた痕跡をこの世から消すためなら、なんだってしてやるわ!!!」
「馬鹿だなぁ。でも、君が犯罪者で良かった」
「躊躇なく殺せるから?」
「躊躇なく監禁できるから。監禁ではないか。君は俺が好きなんだもんね?」
「本当にふざけた人!!」
　美しい人は激昂する。
　両思いならいいよね?
　魔獣の反乱で、ボガートの大暴れで集まった人々の恐怖が具現化する。特級呪霊だ。邪魔だな。
「エクスペトパトローナム!!」
　幸福の呪文で作ったその触手で出来た化け物は、特級呪霊を消し去った。
　対するは、純白の白鳥。
　あはは。
「君は本当に可愛いね。小鳥さえ殺さなければ、俺も魔法界も、全てが手に入ったのに」
「嘘よ。貴方は小鳥の方が大事だった。小鳥のために全てを放り出した!!」
「いいや。小鳥は魂の友達だ。君よりずっと慕わしく感じてたけれど、友情と愛情は別

のものだから。小鳥が魔法使いに殺されたのでなければ、きっと俺は小鳥が死の道を行くのを傍観していたよ」
「死の道……？」
「小鳥はとても強い奴と敵対していたからね。でもまあ、全ては済んだことだ。さあ、やろうか」
　そうして、ダークオウルとクラウンは魔法を激突させた。

まいごのまいごのふくろうさん　ＩＦ

知らない天井だ。
っていうか、覗き込んでくる顔も、自分の名前も、何も知らない。
「誰？　っていうか俺が誰？」
「記憶喪失かよ、雑魚な上に面倒くせぇな」
「悟。そういう事は思っていても言うものではないよ」
「君の名前は小鳥　梟。ここ、東京都立呪術高等専門学校の生徒だよ」
「……？」
「ああもう、本当に面倒だな！」
その後、色々と説明を受けた。
とりあえず、部屋に連れて行かれる。
全く覚えがない。
携帯も当たり前のように開けられない。
色々見ていると、押し入れにトランクが見つかった。
トランクを開けると、普通の中身。なんとなくダイヤルをいじってまた開けると、中

に階段があった。
質量保存の法則とは一体。
いろんな薬品や道具や本が保管してあったけど、これ全部見るの？
肩を落として、トランクを出る。
これから、訓練である。
なんだか不安だ。
俺は杖を持って訓練の場へと向かった。
「じゃあ、軽く戦うぞ。なんだその棒っきれ」
「武器がないとって思って」
「呪具？」
「いや。違う。単なる棒だ」
悟と傑はゲラゲラ笑う。
「あーもう、ほんっとう雑魚。お前、なんで呪術師やってんだよ」
「知らない」
「そうか、記憶喪失だもんな。やめたら？」
「そんな事言われても、何が何だかわからないし。状況をもっと把握してからにする」
「そっか。そうだよな。じゃあ、状況を教えてやるよ！」

「プロテゴ!!」
バックステップで避けつつ蹴りを防御呪文で防ぐ。
しっかりと杖を握って、動かして。口は勝手に動いていた。
「は？」
「は？」
「次はこちらから行くぞ！」
「ちょ、ちょっと待てよ！」
「ステューピファイ!!」
杖を振って、光が悟に向かって走り……止まった。なるほど、やるな！
「無言呪文とは、さすがだな！　そっちからは呪いを掛けてこないのか？」
「さっきの術、呪力を感じなかった。六眼がそれは呪術じゃないって言ってる。なんだそれ」
「魔法に決まってるだろ。呪力とか六眼とかなんだよ」
「……」
悟達と距離が遠い。３人でボソボソと感じ良くないぞ。
「とりあえず、どんな魔法が使えるの？　梟」
「箒とか乗れんのか？」

傑と硝子が質問する。
「箒なんて魔法学校で一年生から習うじゃないか。当然乗れる。覚えている魔法か？　プロテゴとエクスペリアームズは問題なく使える。悪霊の火はうろ覚えだ。後はナメクジをゲップの代わりに吐き出させる呪いと、ステューピファイと、魔法貴族の嗜みとして閉心術もできるぞ」
「マホウガッコウ」
「魔法貴族」
「そのナメクジゲップ魔法、傑にやってみて」
「硝子、鬼かな？」
「そう言えば、小鳥　梟は戸籍がないと言っていて用意してやったな。……なんで見えるだけの相手に用意したんだ……？　覚えがない……」
夜蛾が頭を押さえる。
「ウケる。夜蛾セン、洗脳されてんじゃん」
俺は、ムー、と考えた。
「君らは、魔法使いではないのか？」
「ち「いや。魔法使いだ。梟がどこまで覚えているか知りたいから、出来ることを一覧にしてくれ」」

そんなこと言って、嘘じゃない？　俺が戸惑っていると、夜蛾先生は人形を操った。
なるほど魔法使いだ!!
ほっとした俺は、でも念の為当たり障りのない呪文と効果を一生懸命書き綴った。
同級生三人と先生が覗く。
「色々できるんだな」
「すご」
「等級違いの呪霊が相手できたの、これか」
嫌な予感がした俺は、傑に聞いた。
「傑はどこまで魔法が使えるの？」
「いや、使えないよ？　私は呪術師だしね。魔法使いのスパイさん♪」
「??　……えええええ!!　スパイなの俺!?」
「どう見てもスパイだろ」
「任務教えろ」
「とりあえず報告してくる」
夜蛾先生は行ってしまう。そんな～！
「ってことで、荷物チェックしようぜ！」
「私は携帯の中身チェックをするよ。パスはわかるしね」

なんでやねん。

そして、任務の書籍が見つかった。

『マグル界に逃げ出した魔法生物の討伐の為のマグル学校侵入指示書』

「おおー！　格好いい！」

「仕方ない、協力してあげるよ」

「でも呪霊倒すのも手伝えよ！」

こうして、俺は所属バレしたスパイをする事となったのだった……。

ところで呪霊って何？

謎は多い。